

ケニア日本語教師会会報





第五回ケニア日本語弁論大会







2012年2月15日、日本国大使館日本広報文化センター(JICC)にて、主催ケニア日本語教師会(JALTAK)、共催JICC、後援国際交流基金の下、第5回ケニア日本語弁論大会が、JICCによる日本文化祭と同時に、開催されました。24名の弁士が参加し、3つのテーマにより行われた弁論部門に加え、歌や踊りなどのエンターテイメント部門をケニア人、日本人他、延べ600人以上の観客を数え、大盛況のうちに終了いたしました。

審査員の近藤さん、司会のワイルアさんに よるレポート、優勝のフィリゴナさんのインタ ビューを掲載いたします。

また、スピーチの映像がケニア日本語教師 会サイトにて公開されています。 是非、ご覧く ださい。

http://e-nihon.net/jaltak/?p=107

テーマ

A:私の好きな日本の言葉

B:日本人に伝えたいケニアの○○ C:今まででいちばん驚いたこと

日本語弁論大会入賞者(敬称略)

1位 Filigona Achola Mikenye

2位 Njeri Kagema

3位 Mshamba Babon Ngura

トヨタ賞 Wanda Masinde

特別賞 Ruth Mukulu Mulandi

エンターテインメント入賞校

優勝 Nyandarua Boarding Primary School

2位 Thelyan Children's Home



熱気あふれる会場報告

ウタリカレッジ 日本語講師 近藤 彩 Aya Kondo Japanese Lecturer Kenya Utalii College

「そろ会場へ参りましょう。」 審査の最終打ち合わせを終え、"いざ、「日本語弁論大会」会場へ出陣"。

会場へ足を踏み入れた先には、大勢の観客と関係者で溢れ、「ガラガラだったらどうしよう…」なんていう心配など無用。それどころか、我らが審査員席まで、占居されているという盛況ぶり。

邦人の方はもちろんのこと、なによりもケニアの方の聴衆が 定刻に集まっての開始は、第一関門を乗り越えた瞬間でした。

弁士は、プログラム上では26名の参加。年齢や学習歴、日本滞在歴のある方など様々。さらには隣国ウガンダからの参加者も。

当日、事情があって止む無く辞退した2名を除き、24名のスピーチを審査員という立場だけではなく、とても興味深く、また、大変感心させられる思いで拝聴しました。

24名の弁士のスピーチはそれぞれバラエティーに富んだもので素晴らしかったのですが、やはり、入賞者の「発音」「流暢さ」「質疑応答」は格段に上であり、「文章の起承転結」と「内容とテーマの一致」が優れていました。

「日本語弁論大会」第1位入賞者とトヨタ賞受賞者の内容を一部ご紹介します。

第1位入賞者フィリゴナさん

見事優勝を獲得した彼女の選んだテーマは『私の好きな日本の言葉』。「ありがとうございます」と「すみません」について、自身の日本滞在から得た経験とともに語られました。

ケニアでこの二つの言葉は、「言わなければいけない場面でも言わない」ことが多いため、日本の店員さんに「ありがとうございました」と言われた時、「なぜ、ありがとうございます、って言ってくれた?」と友達に理由を聞いたそうです。ケニアでは、店がお礼を言わなくてもお客さんが来なくなるとは考えていないので、感動したそうです。

現在、ケニアでマッサージ師として働き、様々な国の方がお客さんとしている中、日本人のお客さんだけが施術後にお礼を言うことに初めは不思議に思ったそうです。「無料じゃないので、お礼を言われなくてもいい。」と考えていたものの最近では、お礼を言われなかったら、「気持ちよくなかったのかな。」

と不安になり、お礼を言われると嬉しさとともに安心するようになったということでした。

「すみません」が好きな理由は、怒っていた気持ちが無くなること、そして、喧嘩になりにくいと感じたからだそうです。

「ありがとうございます」: いいことをしたから感謝してくれる。「すみません」: 悪いことをしたから謝ってくれる、この二つの言葉の大切さをフィリゴナさんは、周りのケニア人、特に年下のケニア人に教えていきたいと強く語ってくれました。

「ありがとうございます」と「すみません」が与える言葉の力は、『人と人との関係を円滑にする』と、あらためて、言葉の大切さを考えさせられました。

また、フィリゴナさんは、審査員との質疑応答で、会場を賑 わせてくれました。

審査員: 「あなたが日本人に伝えたい好きなスワヒリ語はなんですか。」

フィリゴナさん: 「うーん。 特にないですね。」

その言葉に審査員一同はじめ、会場にいる人たち全員が笑いの渦に。 暫し、沈黙の後、

フィリゴナさん:「敢えていうなら、『ポレポレ』かなあ。」

と、スワヒリ語で「ゆっくり」という意味の言葉を述べてくれました。日本のキビキビした速さは安心するけれども、「ゆっくり」することも必要だということを追加説明してくれました。

トヨタ賞 (Toyota Kenya Award) 受賞者ワンダさんのスピーチからは「流暢さ」だけに留まらず、『スラムの女子中学生が学校をさぼる理由』の問題点と解決法が短い時間でうまくまとめられ、「ケニアの諸事情」を垣間見ることができました。

ワンダさんは、大学のクラブ活動で、「スラムの女子中学生の大半が『なぜ学校をさぼるのか?』原因解明と支援」というプロジェクトを企画しました。

さぼりの原因は「生理」。生理用ナプキンが買えないためにしばらく学校へ来られないということをワンダさんたちは見つ







けました。そこで、ワンダさんのプロジェクトはナプキン会社と 提携し、「洗って使えるナプキン (一年間使用可能)」を女子中 学生たちに寄贈することにしました。使い方を説明した後、一 人ひとりに袋詰めにしたものを渡すと女子中学生たちは、その 袋からナプキンと共に入っていた下着を引っ張り出し「大喜び の悲鳴」をあげたことにワンダさんは驚いたということです。

ワンダさんのテーマである「今までで一番驚いたこと」。つまり、彼女が知る世界とは全く異なった世界、想像すらしなかった世界を目のあたりにしたのがその時だったのです。ワンダさんのスピーチは単に言葉の表現だけではなく、実際に行ったプロジェクト、そして、対象者からの反応までしっかりと私たちに伝えられました。

ワンダさんには、言葉としての日本語向上だけではなく、これからも様々なプロジェクトに挑戦し、素晴らしい解決法を見出だしてほしいと感じました。

今年は、舞台スクリーンに英文を投影し、弁士は日本語を話すという会場設定でしたので、全く日本語を知らない方、そして、学習して間もない方にも楽しんでいただけました。同日、大使館主催の「日本文化祭」も開催され、出場者および観客は様々な文化体験にも参加できました。

スピーチの幕間にある優勝杯を懸けた「エンターテインメント」も大変盛り上がりました。こちらの出場者、出場校は全部で17!

個人出場の女性は、まるで『NHKのど自慢』に出演しているような雰囲気を醸しだしていました。彼女の楽しげな様子、その「彼女の世界」に私たち聴衆も引き込まれていきました。

「エンターテインメント」 部門は、スピーチ部門とは異なり、 「緊張感漂う」 という言葉は相応しくなく、「ご覧あれ」 という 自信に満ちた風貌が誰しもにあらわれていました。

主に高校生の参加が多かったのですが、「イマドキのオシャレ男子学生によるダンス付きの歌」、「授業の合間を縫って合唱練習を相当練習したであろうと思われる学校」、「見ているだけで心が和む小学生の斉唱・合唱」など日本の歌を扱った

ものから、スワヒリ語による迫力ある「詩の群読」という発表 内容でエンターテインメント部門の審査員の方々には「甲乙付 け難し」だったことと思います。

その結果、例年だと1位のみ表彰のところ、2位まで特例として表彰することになりました。

さて、新しい週を迎えて・・・

日本語弁論大会の感想を聞いたところ、「まだ学習して間もないですが、ところどころ分かる言葉もあり、学習意欲がさらに増しました。」「折り紙が楽しかったです。」と嬉しい答えが返ってきました。「折り紙」に参加した学生たちは、しばらくの間、授業にノートとテキストとともに作品も机の上に並べていました。

卒業を控えた学生たちが最終講義の後、エンターテインメントで歌った曲を皆が口ずさみ、別れを惜しみました。この時、教師である私こそが、「これからも頑張らなければ」とあらためて感じさせられました。

そして、私は学生に恵まれたと・・・





The Fifth Annual Kenya Japanese Language Speech Contest

ストラスモア大学 日本語講師 イアン・ワイルア Ian Wairua Japanese Lecturer Strathmore University

The Fifth Annual Kenya Japanese Language Speech Contest was held on Saturday, 25th February 2012 at the multi-purpose hall of Japan Information and Culture Centre in Nairobi. The contest was opened by the Japanese Ambassador to Kenya Mr Toshihisa Takata.

This year's contest was special because it coincided with activities to mark one year since the devastating earthquake and tsunami that occurred in North Eastern Japan in March 2011. In his opening remarks, Ambassador Takata spoke of the gratitude of the Japanese people for the many messages of goodwill and offers of support that were received from the people of Kenya during the weeks following the disaster. In memory of the disaster, the Speech Contest was held as part of a cultural festival which included exhibition of Japanese food, Karate, origami, and other activities.

Participants in the speech contest were mainly students of Japanese language from schools, colleges and universities all over Kenya. A total of 24 students made presentations in the speeches category while 17 student groups made presentations in the entertainment category. Each speech was composed to fit into one of three themes: 'my favourite Japanese word', 'what I want to tell Japanese people about Kenya' and 'my most surprising experience'. The panel of judges was presided over by Mr Jun Arisue,

Japan Foundation's Japanese Language Expert and Visiting Lecturer at Kenyatta University. Contestants were evaluated for correctness in grammar, content, presentation skill as well as ability to answer questions. Consideration was given for the length of time the contestant had spent studying Japanese language and experience living in Japanese society.

Apart from the high number of contestants in this year's contest, it was noteworthy that they came from a wide variety of backgrounds - students from high school, middle colleges and universities – as well as a wide range of ages – from teenagers to those in their thirties. The chief judge remarked that the quality of speeches was much higher than in the previous year and the audience stayed rapt in attention during the presentations. On occasion they erupted into applause in expression of appreciation of a particularly brilliant part of a speech. It was clear that the event was enjoyable for everyone in the packed hall.

An interesting feature of the Contest that probably differentiates it from other speech contests elsewhere is the entertainment category. For many people unfamiliar with Africa in general and Kenya in particular, it would be normal to think that there is no sense in having songs, poetry and dance in a speech contest. Yet, apart from the fact that it is unthinkable in most African communities to hold any public event without music, poetry and dance, among Africans these forms of entertainment are necessary ingredients within the concept of communication. A peculiar aspect of this tradition is the fact that most Kenyan languages do not have different words for music and dance. For centuries, African tradition has valued music and dance as part of normal social interaction and this continues to be deeply ingrained within the African psyche. It is therefore very natural that in a speech contest, African participants expect that there is also music, dance and poetry.

Music is an expression of life and freedom of spirit. 'As long as we live, there is never enough singing,' said Martin Luther.





And Harry Belafonte said 'you can cage the singer but not the song.' Perhaps this is why it was with joyous spirits that various groups of students from different groups across Kenya presented Japanese songs, Kenyan dance and choral poetry in the speech contest. The audience was pleased and very entertained. This event raises an important debate not just about the role of music in a speech contest but how cross-cultural differences and expectations impact on the learning of foreign languages in Africa and elsewhere.

The overall winner of the Contest was Ms Filigona Achola, a blind massage therapist who lived in Japan for three years before coming back to Kenya. She wove her speech into an interesting and positive view of various Japanese language-related customs. The explicit nature of Japanese politeness as expressed in everyday language impressed her greatly when she visited Japan. She contrasted it to her own culture where gratitude, apology and other aspects of social politeness are often missing from explicit verbal communication but are instead implicitly hidden in actions and other forms of social interaction. She found the Japanese forms of verbal politeness something very valuable. In her African culture it is very difficult for non-natives to understand the subtle forms of politeness and kindness which are often not verbal but hidden in movements, gestures and other non-verbal forms. Her speech raised interesting propositions because Japanese culture is often seen as inward-looking while in fact, Ms Filigona's experience was pleasantly different from this common perception. Her winning speech should help bring about greater awareness about how Japanese culture is perceived by foreigners.

'I am going to be a contestant next year!' exclaimed Job Gicheha, a second year university student who was among the audience. Obviously, this contest was very successful in inspiring and motivating the Kenyan students of Japanese language. By writing and delivering a speech in Japanese, the students and their audiences acquire better and greater appreciation of the vital role that language plays in a global society, becomes an incen-



tive for further acquisition of communication skills and a better understanding of human nature, including of oneself. As the Scottish poet and novelist Robert Louis Stevenson (1850-1895) said, speech is the mirror of the soul; as a man speaks, so he is.





優勝者インタビュー フィリゴナ・アチョラさん 日本のいいことをケニアに伝えたい



A フィリゴナさん、こんにちは。おひさしぶりです。弁 論大会の優勝、おめでとうございます。

F ありがとうございます。

優勝が決まったとき、どう思いましたか。

F 嬉しかった、と言うか、参加してたときは優勝すると 思っていなかったんですよね。他の人は、どんな文章 の内容を書いていたかとか全然知らなかったから、 優勝すると思っていませんでした。びっくりしました。

A 内容的にも、日本のこと、日本で感じたことを、その、ケニアでどうやって活かしていくか、とか、自分の体験にすごく基いていて、審査員の方からも、お客さんの方からも、素晴らしいスピーチだったと、そういう評価でした。

Fはい。あと、生徒さんたちも、ほら、ドラマみたいに話していた子もいたじゃないですか。ドラマっていうか、演劇っていうか。それも素晴らしかったな、って思ったんですけど。

A そうですね。確かに、その、バラエティー豊かな感

心に訴えるんじゃないか経験したことだから

な

第5回ケニア日本語弁論大会で優勝したフィリゴナさんに、インタビューをしました。ユーモアを交えながら、スピーチコンテストの準備や、視覚障害者(全盲)としての日本滞在の苦労、楽しみ、ケニアと日本の違いなどについて話してくれました。彼女にボランティアで日本語を教えている讃井玲子さんと三人で、笑いが絶えない、楽しいインタビュー、雰囲気を残すため、内容はカットせず、ほぼそのまま、掲載いたしました。

F … フィリゴナ・アチョラさん (第5回ケニア日本語弁論大会優勝者) S … 讃井玲子さん (フィリゴナさんの日本語家庭教師)

A ... 蟻末 淳

(聞き手・国際交流基金日本語専門家)

じで。結構、ケニアの弁論大会だと、歌が入ったりとか、パフォーマンスが入ったりとか、色々あるから、そういう意味では、バラエティー豊かで、楽しかった。でも、やっぱり、フィリゴナさんのものは、ある意味、オーソドックスだけど、逆に、それが、一番大事なことを訴えていて、よかったと思います。

テーマや内容はどうやって決めましたか。

F テーマは、一応、三つあったんですよね(注・「私の好きな日本の言葉」「日本人に伝えたいケニアの○○」「今まででいちばん驚いたこと」)。それは、先生といっしょに見て、それで自分で書くことがあるかなあ、と思って、思っていることを、話し合いをして、でも、やっぱり、好きな言葉のテーマがいちばん話すことがあったんですよね。実際の経験だったし、思っていることじゃなくて、経験したことですから、もっと心に訴えるんじゃないかな、と思って、選びました。

A そうですか。じゃ、その言葉を決めるときは、 他のものと、迷ったりとか、そういうことはなかっ たんですか。



F それは、なかったですね。本当のことだったから、迷わなか ったんですよね。

▲ じゃ、最初から、「ありがとう」とか、感謝のことば、「すみま せん」、謝ることばとか、一番自分の大事なことばはこれ、好き なことばはこれ、ってもう最初からずっと考えていた、っていう…

F はい、考えていました。

準備で大変だったことが、ありますか。

F 文章を覚えること(一同笑)。バスの中でも、やってたから。 家にいるとなかなかできないから、街から家に帰るとき、仕事 から帰る途中、バスの中で一所懸命、読んでいました。

A どのぐらいかかりましたか。

F うーん、三週間だったですよね。

S うん、そのぐらいかな?

F そのぐらい、うん。

A じゃ、三週間しっかり準備して、結構大変でしたね。

F 先生も、ちゃんと覚えなさいよ、って(笑)。それも励みにな ったんですよね。やっぱり頑張らなきゃ、っていう気持ちにすご くなりました。

▲ 三週間の努力が実って、しっかりと覚えてましたし、素晴らし かったです。

F (笑)

去年も、フィリゴナさんは弁論大会に出場されました けど、去年と比べて、自分の中で何か違ったところとかあ りますか。

F 去年は読んでましたよね、文章、全部読んでたから、集中力 が途中でなくなってしまったんですよね(AS笑)。読むことに集

仕事から帰る途中、バスの中で一所懸命 読んでいました。

S あ、なるほど。

F 今回は、覚えていたので、もっと話しやすかった。

▲ そうですね、やっぱり、今回、ちゃんと覚えて話したから、こ ちらにも、気持ちも伝わってきたし、内容も、ストレートに伝わ ってきたんだと思います。

F うん、そう。覚えてよかったな、と思いました。

A まだ覚えていますか。

F もうすっかり忘れました。すぐ忘れるんですよね(一同・笑)

日本語を始めたきっかけについて教えてください。

F 日本語の勉強ですか。今までは、指圧の仕事をやってきたん ですよね。でも、あるとき、すごく体が疲れて、腰も一回悪くなっ たんですよね。

それで、これはずっと続けられないな、と思って。ずっと、日 本語に関係にある仕事をやりたいな、と思っていて。でも、サー ティフィケートがないと、仕事もできないじゃないですか。自分 が日本語を話せると言っていても、見せるものがないと、ケニ アでは無理ですよね。

それで、友達に話したら、教えてくれる先生を紹介してあげ ますよ、と言ってくれて、原田先生と言う先生を、紹介してくれ たんですよね。

ケニアでも能力試験をやっていることは全然知らなかった んですよね。その友達から話を聞いて、じゃ、やってみよう、と 言うことになったんですよね。

▲ そうですか。じゃ、それは、ケニアで日本語の勉強を始める きっかけ、と言うことですね。

Fはい。

▲では、元々の日本語を始めるきっかけ、または、日本に行く きっかけは…

F 日本に行くっていうのが初め、だったんですけど、元々、外 国語に興味があったんですよね、外国語に興味があったか ら、指圧、鍼と灸の勉強に、日本に行くつもりだったんですけ ど、私は本当は鍼灸がどういうものか、全然知らなかったんで すよ。一応、日本に行ったら、日本語も覚えられると思います





外国語が全体的に好きだった。

それで、たまたま、 日本に行くチャンス が来た。

よね。鍼灸の勉強のきっかけで、日本語の勉強も、というよう になったかな、最初は。

A その前は、特に日本については、あまり知らなかったんですね。

F 本当に全然知らなかった。行くことも、行きたい、ということ も、思ってなかった、全然。

AS (笑)

A それで、じゃ、鍼灸の勉強しに、日本に行ったっていうことですよね。

Fはい。

▲ それ、たまたま日本だったんですか。 例えば、他の国、中国 とかも…

F いや、たまたま日本だった。

A じゃ、別に日本に行きたいっていうんじゃなくて、鍼灸の勉強をするんなら、たまたま日本で、ということで、日本に行くことになった、と。

Fはい。でも、本当は鍼灸の勉強もしたかったっていうことじゃなかったんですよね。

A ああ、そうなんですか(笑)。

S (笑)

F はい。それは鍼灸をしたかったから日本に行ったわけじゃなかったんですよね。あの…日本語も覚えられるから、日本に行ったわけ。でも、その日本に行くチャンスは、鍼灸の勉強しかなかった。

A ああ、なるほど。でも、別に日本語が好きなわけじゃなかったんでしょ。

F まあ、外国語が全体的に好きだった。それで、たまたま、日本に行くチャンスが来た。

▲ 日本に行くチャンスがあって、じゃ、日本語、外国語もできる から、っていうことですね。

Fはい。

日本に行ってどうでしたか。大変だった話とか、逆に、 何か、素晴らしかったエピソードなんかがあったら、教え てください。

F日本に行く前に、こっちで日本語を勉強したんですよね。六か月ぐらい。週2、3回ぐらいですよね。それで、もう大丈夫だと思ったんですよね。

AS (笑)

Fでも、やっぱり、行ったら全然駄目で。全く何もわからなかったんですよね。人の会話を聞いてもわからなかったし、みんな、すごい早口で話してたから、すごく困りました。言葉が一番困ってしまいました。どこでも日本語ですから。英語もないし、目も見えないし。全部言葉にしなきゃいけない。

A そうですよね。英語とかでコミュニケーションされてないですからね。例えば、看板とかなら、英語で書かれていたりもするけど、耳から入ってくるのは、全部日本語ですもんね。

F それで、あと、目で見えるとね、スーパーに行ったら、こう、目で見たらすぐわかるじゃないですか、自分で。人に頼まなくても。でも、私はだれかに頼まないと駄目だし。それから、何でも全て、言葉にしなくちゃいけない…



A そうですよね、言葉でコミュニケーション、とらなくちゃいけないから。

F はい。それがいちばん大変でした。

A ずっと、大変でしたか、それとも、ある程度になったら…

F いや、6か月ぐらい…3か月までぐらいかな。すっごい大変でした。で、3か月経った後に、まあ、内容は何とかわかってきたんですね。自分からそんなに話せなかったんですけど、でも、人が言っていることは、あ、こういうことについて話しているかなという…

それでまあ、6か月ぐらいになってから、もう、自分から少しずつ話すことができたんですよね。

A じゃあ、そのぐらいになってから、色々、日本人とコミュニケーションをとったりとか、そういうことで、段々生活も楽しくなってきたっていうか…

F 楽しくなりました。意味はわからなくても、やっぱり、真似をできた。言っていることがわからなくても、それは、何ですか、とか聞いたり。最初はそれも全然できなかった、全く。本当に話しても、何言っていても、全然リピートできなかったんですよね。でも、ある時、真似って言うか、内容はわからなくても、言葉を聞き取れたんですよね。それは何ですか、と聞けるようになりました。それで、説明してもらってたんですよね、辞書も使いながら。

何でも全て、言葉にしなくちゃいけない…

残っていることが頭にいちばん自由に出かけられる



今、自分がいちばん覚えてる日本の滞在でのエピソー ドとかありますか。

F やっぱり、自由に日本で出かけられることが、頭にいちばん残っているんですよね。日本はすごく便利なんですね、視覚障害者にとっても。点字ブロックもあるし、バスや電車の中でも放送が入っているじゃないですか。次は何々駅とか。それで、人に頼らなくてもいい。着いたら自分で降りて、行きたいところに行ける。全然困らない。

こちらと全然違うから。こちらは行き過ぎたりすることもあ

るし (一同・笑)、マタトゥ(注・ケニアの乗り合いバス)のお兄さんに言ってても、違うところに連れて行かれたり、渋滞したら、違う道を使うでしょ。

A フィリゴナさんにとっては、もう、今は、ケニアよりも日本の方がそういうふうに暮らしやすかったり…

F 暮らしやすかった。(周りの)みんなは心配してくれてたんですけど、でも、私にとっては、すごく住みやすかった。ケニアの状況からわからなかったけどね。





TOYOTA **JALTAK**



mbassy of Japa in Kenya

▲ そうですか。それは結構意外ですね。確かに、日本はそうかも しれないですね。日本もまだまだ、視覚障害者とか障害者に対し てのケアが足りないな、って思いますけど、それでも、ケニアに比 べれば…

2012. Send your speech to "jaltak.sc2012@gmail.com" by 31st January 2012.

Wait for communication from the organizing committee

F 全然違いますよね。電車の、自動販売機のところも点字で値段 が書いてあるじゃないですか。

だから、本当に、ある程度、自分で生活できますよね。人にそん なに頼らないで。

▲ フィリゴナさんは、ずっと、ケニアで、こちらの言葉で暮らして いたけど、それでも、日本で、言葉がまだ少し不便な部分があって も、日本の方が、総合的には暮らしやすい…

F うん、暮らしやすい。お金もわかりやすいし。(一同・笑)

A ケニアのお金ってわかりにくいですか。

F うん、お札はわかりにくいですよ。はい、お札はわかりにくい。

S ついていないんですよ、点字が。[フィリゴナさんに向かって](マ タトゥの人とかお客さんに)騙されるんだよね、その、これ500って 言われて、50とか渡されて。

F そうそう。

▲ それ、ひどい…大きさも同じ?

F 大きさはちょっと違いますよね。でも、結構 わかりにくい。まあ、1000シル(注・ケニアシリ ング)と50は何とかわかるんですけど、その間 は、100とか200とか500とか、わかりづらい。

A えー、そうなんだ。 あと、 小さいお金も、ケニ ア、1シリングとか色々な種類があるじゃない。

F そうそうそう(一同・笑)

▲ あれもわかりづらいでしょう。

F 時々、マタトゥの兄さんに1シル渡したり、10 シルって思って。怒られるんですよね。これは1 シル! (一同・笑)

A そっか。そうだよね。点字も、考えてみたら、 日本って例えば、ジュースとお酒がわかるよう に点字がついてたり…

F ついてる。シャンプーとか、リンスとかね。

S なるほど。

A 案外、結構、そういうところあるんですよね。

F ありますよ。

手紙を

た

A 気付かないけど、僕ら、普段暮らしている と。ケニア、全くないんだ。

F全然ないです。そう。

S 日本から戻って中央銀行に手紙を書いたそ うです。あの、お金に点字をつけてくれって。

▲ いや、本当ですよね、でも、そういうふうにや っても、まだ変わらない。

F 変わらない (笑)

S無視、無視だったんだよね。

F そう、無視だった、返事もない。

▲ ケニアだって、視覚障害者の人だってたくさ



んいるだろうし、そういう人たちもね、少しずつ自立して生きられるようにってね、考えていかなくちゃいけないのに。

F そう。でも、自分のことで、精一杯ですね(一同・笑)。精一杯なのと、もう、関係ない、自分じゃないから、別に、気にしてないですよね。

▲ そうですよね。そうか。成程。何か、色々考えさせられます ね。

フィリゴナさんにとって、日本とか日本語っていうのはどういうものですか。

F 歴史が長いですよね。文化も独特ですよね。日本では、考え方もやっぱり違いますよね、他の国と比べると、ケニアにしても。例えば日本で気にすることはケニアは全然気にしない。

…まあ、ケニアは大雑把ですよね(笑)。細かいこと、あんまり考えてない、気付いてないですよね。気付いてないから、気にしない。

A うん。いいところもありますけどね、それが。

F そうですか? (一同・笑) いらいらすることが多いんじゃないかな。例えば、相手のことを考えてほしいっていうか、自分のことばっかりじゃなくて、人に迷惑をかけない、とか。例えば、迷惑をかけたらどういう気持ちになるか…自分なら嫌だから、他の人に迷惑をかけないでほしい、とか、そういうことがありますよね。

A そうですね。日本では、子供のときから、自分がやられて嫌なことは絶対人にしちゃいけないって言われますからね。

s はい、はい。

F ああ、そうですか。

A それが、結構、日本人のモラル、道徳のいちばん大事なところって言うか。

F うーん、それはすごいと思いますよね。ケニアは全然ない。だから、バスの中とかプッシュするじゃないですか、入るとき。だから、足が不自由な人がいても全然気にしないし、誰かのものが落ちても、ちょっと気をつけるとか、全然、ない。その上を、踏んだりとか。やっぱり、自分と違う人間がいるから気をつけてほしいですよね。

A でも、ケニア人ってやさしいじゃないですか。

F 外国人にやさしいかもしれませんけど、ケニア人同士には別 に…

A あ、そうか、ケニア人同士はそんなやさしくない?

F やさしくないよ。

A あ、そうですか、すみません。(一同・笑)

S おもしろい…

A でも、それは、ひょっとしたら、日本人も言えるかもしれない…

s はい、はい。

A ですよねー。日本人も、外国人に親切にすることもあるし、あと、知っている人だと親切にするけど、例えば、全然知らない人だと、例えば、電車の中で全然席を譲らなかったりとか、「すみません」も言わなかったりとか、そういうことも結構、ありますよね。

ケニア人は 子どもにやさしい

F ケニア人は、多分、子供にはやさしいかもしれませんね。

A そう、子供にやさしいですよね、ケニア人。

S 本当、うん。

F それは、ケニア人の子供にもやさしいですよね。でも、あとは、全然、関係ない…

A そっか、確かにそうかなあ…あ、それは結構、意外でした ね…でも、子供にやさしいっていうのはケニア人のいいところで すよね。日本人はね、逆に、子供に厳しかったりするじゃないで すか。

S あ、そうですね。

F あ、そうですか?

A うん、結構、公共の場所とかだとね、何か、ちょっと、子供が 騒いだりすると、子供と、そのお母さんとかにね、厳しい目が…

S そう、そう、にらみつけたりとか、さっき覚えた、「にらみつける」…

F 「にらみつける」、うん。でも、子供は、しょうがないじゃないですか、騒いでても。



A そうそうそう、だから、しょうがないってね、日本人って多分 思えないんですよね。

S あ、そうですよね、確かに。

F お母さんも、子供をコントロールできないところがあるから ね。

A そうそうそう。多分、そこら辺は、ケニア人の、何か、こう、大らかなところ? 大雑把と繋がるかもしれないけど(一同・笑)。まあ、うるさくてもいいや、みたいな感じがあるけど、日本人は、そういうところでは、静かにしなさいっていうのがあるから。

S そうですね、うーん。

A 子供にもそういうこと要求したりとかね。結構、それは、ちょっと日本の、生きづらいところかな、って時々思いますけど、うん。

日本語は自分の話してきた言葉と比べてどうですか。

F 日本語は、色々な言い方がありますよね。フォーマルとか、フォーマルじゃない言い方とか。一つの単語は、色々な意味があるんですよね、点字で。漢字なら、多分書き方が違うと思うんですけど。発音が同じでも書き方が違うんですけど、でも、点字は変わらないじゃないですか、ひらがなですから。

A そうだよね。結構、点字だと、レベルが上がると、中国から 来た漢語、漢字の言葉が増えてきて、読み方が同じ言葉が増え てくるから。

F あ、そうですか、漢字でも、読み方が…

A 違う漢字を使って、読み方が同じで。そういう言葉がどんど ん増えてくるんですよね、レベルが上がると。そうすると、漢字 があるから、目で見て、すぐわかる。

F わかる、うん。

A それは問題ないんだけど、確かに聞いてわからないし、すぐ に。点字も同じだから。それ、結構大変ですよね。

F だから、一個ずつの意味を覚えなくちゃいけないんですよね。

A 結構、点字で(日本語を)やるの、大変だな。

F そう。読解で読んでいるときは、何か、こういう意味かな、と 思っても、でも、違ったり、とか。

日本語は リッチな言葉だと 思います

A 確かに大変かも。そういうところが、今、大変だな、って感じてますか。

F まあ。でも、リッチな言葉だと思います。色々な言い方がある こと。あと、日本語はすごく丁寧。女の人が使うことばと男の人 が使うことばが、違うとか。

A そうですね、確かに。スワヒリ語とかは、そういう違いはありませんか。

F いや、ないです。同じですよね。ただ、声の言い方っていうか、ニュアンスでわかるんですけれども、言葉はいっしょですね。

A フィリゴナさん、部族、出身はどちらですか。

F えーと、ヴィクトリア湖、ルオー族ですね。

A ルオーの言葉はまたスワヒリ語と全然違いますよね。

F うん、全然、違います。

A どうですか、ルオーの言葉も、そういう、色々な言い方とか、 人によって変えたりとか、男の人と女の人としゃべる言葉が違ったりとか。

F うーん、ないですよね。ない。同じ。ただ、例えば、おばあさんたちが使っていた、古いルオー語と、私たちの今のルオー語と、ちょっと違って来る。古いルオー語と新しいルオー語があるみたいなんですよね。

でも、段々なくなってきている。年寄りももう段々いなくなってるから。

A でも、ルオー語自体はみんなしゃべっているんですか。それ とも、段々英語とかスワヒリ語に変わってきているとか。

F うん、変わってきているんですよね、混ぜたりとか。ルオー語とスワヒリ語を混ぜたりとか。特にナイロビに住んでる子供達。全く、パーフェクトなルオー語をしゃべれない子が多いかな。

A なるほど。



日本のいい考え方を ケニア人にも伝えたい

これからの抱負を教えてください。

F やっぱり、例えば、日本語の先生をやるとしたら、日本のいいことをケニアに伝えたい。先生の仕事をしながら、日本語の先生の仕事をしながら、日本のいい考え方をケニア人にも伝えたいですね。例えば、この間の「すみません」とか「ありがとうございます」とか。それから、丁寧語とか、マナーとか。

A そうですか。今日は、どうもありがとうございました。

F いいえ、どういたしまして。

フィリゴナさんのインタビューは以上です。最後の方、聞き手の立場なのに、ちょっとしゃべりすぎたかな、 と反省しましたが、話しているうちに、楽しみながらも、色々考えさせられるのは、フィリゴナさんの人柄、穏 やかな話し方と、経験に裏打ちされた深い考えだと改めて思いました。

編集しながら、何回も思い出し笑いをしたり。インタビューの和やかな雰囲気が伝われば嬉しいです。 日本のよさを伝える日本語の先生の夢に向って行ってください。応援しています!

(蟻末)

第五回ケニア日本語弁論大会 新聞広告



第五回ケニア日本語弁論大会 プログラム

JALTAK

INTRODUCTION

There are about 1,000 Kenyan students who lear apanese language at various institutions, which is among the highest in Africa. Furthermore, Nairobi and Cairo are the only exam centers in Africa where the earners can sit for iinternational Japanese Language Proficiency Test (JLPT).

Together with Embassy of Japan, Japanese Teachers' Association of Kenya (JALTAK), established in 2002 to promote activities related to Japanese language education, has been annually organizing two major events, that is, the Japanese Language Proficiency Test and Japanese Speech Contest over the recent years.

The Japanese speech contest is meant to encourage the learners of the language and also to promote the cultural exchange between Kenya and Japan. Special thanks goes to Japan Foundation, Toyota Kenya JICA and other companies and individuals who kindly sponsored this event.

Thank you very much for coming to Japanese Speech Contest 2012 today. It is our sincere wish that you enjoy the whole event.







Coorganized by Embassy of Japan and Japanese Language Teacher's Association of Kenya

Embassy of Japan

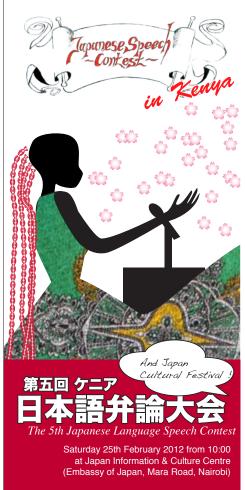


Supported by Japan Foundation, Toyota Kenya JICA and others







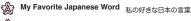




PROGRAMME

- 9:30 Arrival and registration of participants Arrival of Guests
- Opening and Preliminaries MC 10:00
 - Opening Address: HIs excellency Mr. Toshihisa Takata, Ambassador of Japan to the Republic of Kenya
- 10:20 Contest Speeches (contestants 1-15)
- 12:20 Entertainment Break
- 13:00 Lunch
- 14:00 Contest Speeches (contestants 16-26)
- 15:20 Entertainment Break
- 16:10 Announcement of the Winners and Comment by Chief Judge Mr Jun Arisue
- Closing Remark by K. Nakamura, Chairman, JALTAK 16:25 16:30 END

THEMES



What I want to tell Japanese people about Kenya 日本人に伝えたいケニアの〇〇

My most surprising experience

今まででいちばん驚いたこと



PRIZES

1st: Japanese Learner's Electronic Dictionary

2nd: Sanyo TV / Japanese vocabulary book

3rd: Nakumatt Shopping voucher worth 4,000 ksh (from umitomo Corporation) / Japanese dictionary

Toyota Kenya Award: Special Trophy / Japanese

Outstanding Performance: Japanese Grammar Book

For all the contestants: Chopstick / Nisshin bandana / Stationer For all the participants of the entertainment: Nisshin bandana

CONTESTANTS

Daniel Areba Machoka

(Engineer, Studied 2 years an 6 months)

Josephine Karumwa

(USIU University Student, Studied 6 months)

3) Sylvia Nabwire Obiero

(Kenyatta University Student, Studied 1 year)

Cynthia Wairimu Murimi

(Strathmore University Student, Studied 2 years)

David Wagude

(Kenyatta University Student, Studied 2 years)

6) **Festus Cheruivot**

(USIU University Student, Studied 200 hours)

Victor Rubahimbya

(Makerere University, Uganda, Studied 1 year)

8) Ann Wanjiku Mwangi

Patrick Murage Kamonde

(Kenyatta University Student, Studied 1 year and 3 months)

10) Esther Meeuwissen

(Student, Studied 4 months)

11) Mshamba Bayon Ngura

(Chavakali High School Student, Studied 1 year)

12) Ruth Mukulu Mulandi

(Kenyatta University Student, Studied 1 year)

13) Bryan Mbugua Kamunyu

(USIU University Student, Studied 200 hours)

14) Gina Ashimosi

(Strathmore University Student, Studied 2 years)

15) Njeri Kagema

(Kenyatta University Student, 1 year in Japan and Studied 1 year and 6 months)

16) Echaminya Mbarani

(Strathmore University Student, Studied 6 months)

17) Johnkirk Gikonyo Muchiri

(Kenyatta University Student, Studied 1 year)



(USIU University Student, Studied 7 motnths)

19) Filigona Achola Mikenye

(Massage Therapist, 3 years in Japan and Studied 1 year and 6 months)

20) Michael Ochieng

(Strathmore University Student, Studied 2 years)

Luke Davies

(Hillcrest High School Student, Studied 5 months)

Marvin Gichaga

(Chavakali High School Student, Studied 8 months)

Newton Malala Ojiambo

(Kenyatta University Student, Studied 6 months) 24) Hiromi Midika Hashimoto

(Student, 2 months in Japan)

25) Omosa Elijah 26) Wanda Masinde

(Teacher, Studied 10 months)

(USIU University Student, Studied 2 years)

ENTERTAINMENTS

- Thika Children's Rescue Centre Ngotho Gathu
- Chavakali High School Kipkeino Primary School
- Getathuru Rehabilitation School
- Karatina Girls High School
- Bishop Gatimu Ngandu Girls High School
- Thelyan Children's Home
- Tumutumu Girls High School
- 10) Grand Kago Academy
- Utalii College Enedaresha Boys High School
- 13) Kerugoya Girls High School Gataragua Girls High School
- 15) Nyandarua Boarding Primary School



第一回ケニア日本語教育会議



2012年8月4日、5日の二日間にわたり、日本大使館広報文化センター(JICC)にて、主催JALTAK、共催JICC、 共催国際交流基金の下、第一回ケニア日本語教育会議が開催されました。サブサハラアフリカでは初の大規模 な日本語教育に関する会議に、ケニアは勿論、マダガスカル、エチオピア、ウガンダから計24名が参加いたしま した。基調講演に東京外国語大学留学生日本語教育センター長伊東祐郎教授、ワークショップに国際交流基 金カイロ日本文化会館村上吉文日本語上級専門家を迎え、東アフリカの日本語教育の発展のため、二日間に 渡り、講演・実践報告・研究発表・ワークショップ・座談会が行われました。

会議の模様は国際交流基金「をちこちMagazine」にも掲載されています。

http://www.wochikochi.jp/report/2012/12/japanese-east-africa.php

また、今後、実践報告・研究発表並びに講演・座談会を全て記載した報告集が発行予定です。

第一回ケニア日本語教育会議報告

ケニア日本語教師会会長 USIU 日本語講師 中村勝司 Katsuji Nakamura JALTAK Chairman USIU Japanese Lecturer

8 月4日、5日と二日間、ナイロビの日本大使館の多目的ホールで、ついに待ちに待った、第一回ケニア日本語会議が盛大に開催されました。サハラ砂漠以南のアフリカでこうした会議を行うことが初めてであるだけでなく、東アフリカの日本語教育者が一同に集うのも初めてであり、また研究報告

などを行う場が設けられたのも初めてという、アフリカの日本 語教育の歴史に残る一大イベントでしたが、実際やってみるま では、どうなるものかと、心ではひやひやしていました。参加者 は、国内だけではなく、日本、エジプト、エチオピア、ウガンダ、 マダガスカルからも招待した先生方がいらっしゃいました。

日本からは東京外国語大学留学生日本語教育センター長の 伊東祐朗教授をお招きし、基調講演をしていただきました。日本語コースでの学習達成目標を具体的にし、その達成度を測るためにどういった試験等が必要か、そしてその試験に臨むにはどういった授業が必要かと逆算していくことの重要さを学ぶことができました。伊東先生の講演は非常にわかりやすく楽しいもので、参加者もみな大満足しておりました。

初日の午後には、八本の研究・実践報告がありましたが、三 本はアフリカ人の先生による発表で、そのうち二人は日本語に



よる堂々たる研究発表でした。個人的には、まさか日本語教育がまだまだ未発展のサハラ以南のアフリカにおいて、こうした 光景が見られるとは思っていなかったので、うれしい驚きでした。また、こうした事実によって、多くの参加者にとっても、今後の日本語教育の発展のために希望が膨らみ始めた会議であったと思います。

二日目の午前には国際交流基金カイロ文化センター所長の村上吉文先生に「はじめての教案」と題して、授業の流れを「①導入、②基本練習、③応用練習、④評価」の4段階で実際に作ってみるというワークショップを行っていただきました。こちらも非常にわかりやすく実際的なワークショップで、この会議のあと、何人かの参加者は早速、学んだものを授業で使い出したとの報告を受けています。

そして午後には東アフリカ各国の日本語教育の現状 について、各国の教師から発表がありました。各国の状況を聞き、東アフリカの日本語教育に携わる教師たちは、みな、それぞれの地において孤軍奮闘し、言葉では言い表せないほどの努力をされている様子を知ることができました。また地域共通の悩みや、国別に異なった課題などがあることもわかりました。

そして更に、そうした認識を元に、会議の集大成として、「今後の東アフリカの日本語教育」について、座談会形式の討論会を行いました。座談会では、各国や地域での日本語教育が直面する課題についても討論いたしましたが、必ずしも何か具体的な解決策のようなものが、見つかったわけではなかったかもしれません。しかし、東アフリカ各国の実情をお互いに認識でき、ほかの国の同僚の努力から多くを学び、また今後の情報交換などのためのネットワークができたのは、この会議での大きな成果の一つであったと思います。

最後になりますが、今回の会議の立役者である、国際交流 基金専門家、蟻末淳先生にケニア日本語教師会を代表して感 謝の意を深く表させていただきたいと思います。こうして歴史 的な会議ができたのも、蟻末さんが常にケニアの日本語教育 において今何が必要なのかを思索し、会議の発案から実際的 な業務等、この会議のために献身的なご努力してくださったお 陰であると思います。ケニア日本語教師会としましても、今回 の会議の成功を忘れず、更に今後の発展のために活かしていこ うではありませんか。





First Japanese language Education conference in Kenya 2012

マダガスカル日本語教師会会長 アンタナナリボ高等技術学院日本語講師 ラクトマナナ・アンビニンツア・スルフニアイナ Ambinintsoa Rakotomanana Solofoniaina Japanese Language Teachers' Association of Madagascar Chairman Insttut Supérieur de Technologie d'Antananarivo Japanese Lecturer

The first Japanese language Education conference in Kenya organized by the Japan Foundation in Kenya was held at the Japan Information and Cultural Center (JICC), Embassy of Japan in Nairobi, on 4th and 5th August 2012. It was divided into four parts: First, in the morning of Day I, there was the keynote address on the language instruction and testing by Prof. Sukero Ito from the Tokyo University of Foreign Studies. The second part was the presentation of the research and report of experiments in our teaching. Day II began with the workshop, "My first teaching plan," which was facilitated by Prof. Yoshifumi Murakami, Japan Foundation Cairo Japan Culture Center. The last part was a series of presentations on the current status of Japanese language education in East Africa countries. There were 28 participants (Japanese native and non-native speakers) from eight countries.

What I learned from the conference

1. Language instruction and testing

The keynote lecture, "Language instruction and testing" was presented by Prof. Sukero Ito, renowned expert of curriculum





design of Tokyo University of Foreign Studies. We learned how to evaluate the students and how to give tests, according to the learning goals we set for the course. These are one of the most difficult things to deal with for the teachers.

2. Research presentation

There were presentations on different researches by the Japanese teachers in East Africa, which was intended to improve Japanese language education, such as exploration of the Facebook in Japanese classes, attempt of developing syllabus for tourism Japanese, and comparative linguistic. The participants could share their experiences about Japanese teaching methods in their countries.

3. Workshop

The workshop "My First teaching plan" facilitated by Prof. Murakami, taught us the method of giving basic exercises. The idea was, after making clear goals and stating the topic and the situation for each lesson, we should prepare basic exercises. This can be done by filling the excel sheets that guide us to formulate simple exercises. It made us realize that preparing appropriate basic exercises could be a very easy task.

4. Reports on the current status of Japanese language education in East Africa countries and Panel discussion on the way forward

There was a series of presentations by the participants on the current status of Japanese language education in different countries of the region. It was evident that there were some common challenges across the region, while others were peculiar. The following panel discussion shed light on possible solutions to some of the issues, while bringing the participants from the region together.

Action Plan

The question that was very critical to me, after attending the conference and coming back to Madagascar, was "What should I do?"

First, I realized that I need to share the knowledge that I got from the conference with other Japanese teachers in Madagascar. I therefore made a presentation about what I learned in the conference, and discussed about it with the fellow Japanese teachers. The session was held at the end of August 2012.

Another important course of action I came up was to write new syllabus of each level of Japanese language courses in Madagascar. I believe that would help streamline Japanese language education in Madagascar and the leaners would have syllabi that were relevant to our needs and environment. I am really determined that I would do my best to contribute to the development of Japanese language education in Madagarscar.







第一回ケニア日本語教育会議プログラム

「授業を作る — コースデザインから評価まで —」 2012年 8月4日(土)、5日(日)

於在ケニア日本国大使館日本広報文化センター多目的ホール 主催 ケニア日本語教師会

共催 在ケニア日本国大使館日本広報文化センター 後援 国際交流基金

8月4日(土) 10.00-18.00

9.30-10.00 受付

10.00- 開会式

在ケニア日本国大使館日本広報文化センター宇賀神実紀所 長 挨拶

ケニア日本語教師会中村勝司会長 挨拶

参加者自己紹介

10.30-12.00 伊東祐郎東京外国語大学留学生日本語教育センター教授 基調講演

「授業とテスト」 (講演1時間・質問等30分)

多くの日本語教師が作成するテストは、カリキュラムに基づいた到達度テストであろう。一般的には、授業で教授した文法項目や新たに導入した語彙、音声などが出題内容になる。また、作文力やスピーキング力などの運用力の獲得が学習目標になっている場合には、書かせたり話させたりするパフォーマンス・テストを実施することになる。日本語のテストは、言語教育と言語習得と密接な関係にある。テストが学習と教育の効果についての情報を得るうえで必要不可欠なものである以上、日本語教師も実際の学習者の成果 (Outcomes) を積極的に具現化して、学習者および教師双方に共有されたものになっていることが望ましい。授業とテストの密接な関係について考えてみたい。

12.00-14.00 昼休み

14.00-17.45 実践 · 研究発表

— E-learning — (司会・近藤 彩)

14.00-14.20

蟻末 淳(ケニア・ケニヤッタ大学) 中村勝司(ケニア・USIU)

「日本語クラスでのFacebookの使用実践例」

14.20-14.40

イアン・ワイルア(ケニア・ストラスモア大学)

「Towards Integration of Social Media into Blended Elearning for Japanese Language in Kenya」

14.40-14.50 質問時間

- 観光日本語 - (司会・近藤 彩)

14.50-15.10

蟻末 淳(ケニア・ケニヤッタ大学) 中垣友江(ケニア・Prestige Global / 大阪大学大学院)

「ケニア現地e-learning教材作成の試み」

15.10-15.30

アンビニンツア・ラコトマナナ(マダガスカル・Institut Supérieur de Technologie d'Antananarivo)

「マダガスカル人日本語ガイドのための『観光日本語』シラ バス作成」

15.30-15.40 質問時間

15.40-16.10 コーヒーブレイク

— 日本語とスワヒリ語の比較研究 — (司会・蟻末 淳)

16.10-16.30

モニカ・カフンブル(ケニア・Catholic University of Eastern Africa)

「概念メタファーでの比較研究」

16.30-16.50

中垣友江(ケニア・Prestige Global / 大阪大学大学院)

「『勧誘』に対する『断り』における日本語・スワヒリ語・英語の対照 ―ケニアのスワヒリ語・英語話者を対象に―」

16.50-17.00 質問時間

— 日本語教育の実践と研究 — (司会・蟻末 淳)

17.00-17.20



中村勝司(ケニア・USIU)

「日本語初級クラスでの『学生の不安・緊張度、教師の対応、教室活動』と『学生の達成感』の関連性:予備調査」

17.20-17.40

近藤彩(ケニア・ウタリカレッジ)

「古典に親しむ ― 変体仮名に挑戦 ―」

17.40-17.50 質問時間

18.30-20.30 懇親会 (Nyama choma)

8月5日(日) 10.00-18.00

10.00-12.00 村上吉文国際交流基金カイロ日本文化センター日本語上級専門家 ワークショップ

「はじめての教案」

ワークショップでは、基本的な授業の流れに沿って簡単な教案を作り、それをグループごとに実演してみます。と言っても難しいことはありません。こちらで教案の部品のようなものを用意しますから、皆さんはゼロから教案を書くのではなく、その部品を組み立てるだけでいいです。授業の流れは「①導入、②基本練習、③応用練習、④評価」の4段階で考えます。教案ができたら、実際に別のグループを学生の代わりにして、授業を実演し、お互いに評価しあってみましょう。

12.00-14.00 昼休み

14.00-16.00 発表 「東アフリカの日本語教育事情」 (司会・中村勝司)

14.00-14.20

リアナソア・アンドリアリニアイナ(マダガスカル・忍尽クラブ) 「マダガスカルの日本語教育」

14.20-14.40

古崎陽子(エチオピア・メケレ大学) 大場千景(エチオピア・メケレ大学)

「エチオピアにおける、日本語講座の現状と、学生たちの声」

14.40-15.00

河住靖則(ウガンダ・マケレレ大学)

「ウガンダ・マケレレ大学日本語教育事情」

15.00-15.20

山岡洋輔(元タンザニア・ドドマ大学)(代読・中垣友江)

「タンザニア・ドドマ大学における日本語教育プログラムの 現状と課題 |

15.20-15.40

鶴岡聖未(スーダン・ハルツーム大学)(代読・近藤彩)

「スーダンの日本語教育事情と今後の課題についての一考」

15.40-16.00

蟻末 淳(ケニア・ケニヤッタ大学)

「ケニアの日本語教育」

16.00-16.10 コーヒーブレイク

16.10-17.30 座談会 「東アフリカの日本語教育」

(スーパーバイザー 伊東祐郎教授・ 村上吉文日本語上級専門家 / ファシリテーター 蟻末 淳)

17.30-18.00 閉会式

参加者「ふりかえり」

閉会の辞 ケニア日本語教師会中村勝司会長





Kenyatta University Language Day

Kenyatta University Language Day

ケニヤッタ大学日本語クラブ会長 スーザン・カリミ Susan Karimi Kenyatta University Japanese Language Association, Chairlady

The annual Kenyatta University Language Day was this year held on the 17th of March at the Main Campus in Nairobi. The purpose of the event was to raise interest and awareness amongst the students; both from within and outside the campus, on the existence of the foreign language programmes offered in K.U and also on the significance of learning a foreign language in this globally changing world.

The Japanese section of the event had various Japanese themed exhibitions, presentations, entertainment and activities which aimed at creating specific interest in the learning of Japanese language and culture. They were organised by the Japanese Club of K.U in collaboration with the J.I.C.A volunteers. We also received much needed assistance from visiting exchange students from Japan.

The cultural activities included a syodou calligraphy writing demonstration and competition where the students proved their prowess in Kanji writing using the special syodou writing materials. There was also Japanese shiatsu massages offered by the J.I.C.A volunteers. The students also learned the special Japanese paper craft of Origami were the most special designs were awarded with gifts and souvenirs.

The performances included a Japanese musical presentation by the Japanese club choir. There was also a very entertaining sumo demonstration conducted by the J.I.C.A volunteers. Last but not least was a Judo demonstration by the K.U Judo club which left the audience to their feet wondering how the members were not getting hurt during some truly intense fight scenes.

The highlight of the day, as far as entertainment, was clearly the Japanese "Yosakai" fisher dance. It was a depiction of what Japanese fishermen do while fishing in the high seas, the dance was led by two Hiroshima university exchange students together with our very own K.U Japanese Club, It was a truly marvellous dance

The day would not have been complete without a sampling of Japanese delicacies. With the aid of Kiruri Sensei, the club prepared Japanese makizushi, Yakisoba and delicious riceballs. Not only were the people allowed to sample the food, but they were also guided into making their own pieces so that they can use the knowledge learnt later on and share it with friends and family. Now almost all Japanese Language students in K.U can prepare a Japanese meal and snack with ease.

By the end of the day, we had received a lot of positive feedback from both participants and the visiting institutions. They confirmed that they not only had they thoroughly enjoyed themselves, but that they were also very enthusiastic about learning more about Japanese culture and language; starting with enrolling in our Nihongo classess.

Our innermost gratitude goes to all who endeavoured to organise the event and also to all who participated for making the day truly worthwhile.

どうも ありがとうございました!!



JALTAK

Language Dayでの日本文化紹介

青年海外協力隊 日本語教師 小谷裕子 Yuko Odani Japan Overseas Cooperative Volunteer KWSTI Japanese Language Teacher

3月17日に催されたKenyatta UniversityのLanguage Dayに、青年海外協力隊から9人が参加し、日本文化紹介をしました。

折り紙と書道の体験コーナー、巻き寿司試食コーナーに加え、隊員がサポートしている全盲の指圧師による指圧体験コーナーに分かれて紹介していきました。

ケニアの学生たちは初めての指圧に興味津々。順番待ちの 列ができました。折り紙体験では、紙でできた鳥に喜んでもら えました。書道体験では、カタカナで自分の名前を書くことに 挑戦したりしていました。巻き寿司にももちろん興味津々。日 本語の学生も、初めて寿司を巻き、満足そうでした。

それから、元相撲部の協力隊員による相撲紹介もしました。客席から希望者を壇上にあげた相撲の試合には、観客が 思わず立ち上がって応援するほどの盛り上がりでした。

日本文化を紹介するおもしろさ、楽しさを改めて感じた一日 でした。





日本語能力試験 (JLPT)

2012年12月2日(日)に、日本国大使館の協力の下、ケニア・ウタリーカレッジにて、国際交流基金日本語能力 試験(Japanese Language Proficiency Test)が、ケニア日本語教師会により、行われました。この試験は世界 で一斉に行われる試験であり、全世界で毎年60万人ほどが受験します。

サブサハラでは唯一の実施地であるケニアでは2006年より実施されており、2012年で7回目を数えます。

2011年より、5つの級からなる新試験が導入されており(以前は4つ)。級はN1からN5にわかれており、N1が最も難しく、N5が最も簡単です。

2012年度のケニアでの受験生は61名を数えました。ケニアでは、N5の受験生が半分以上を占めます。 受験者には、2013年3月上旬に合否結果が届けられることになっています。また、インターネットでの結果発 表は1月31日から3月15日までです。

http://jlpt.jp/

編集後記

ようやく、第3号をみなさまにお届けすることができました。前回の第2号から約1年、私のケニア滞在も2年半になろうとし、ケニア人からも、ポレポレ(スワヒリ語で「ゆっくり」)だと言われるようになった私の本領発揮のようです。

本号は、第5回ケニア日本語弁論大会、特に、優勝したフィリゴナさんへのインタビューを中心に据え、お送りしましたが、いかがでしたか。楽しんでお読みいただければ、大変嬉しく思います。

私事ながら、私の任期もあと半年余りとなりました、無事次 号を発行してから、ケニアを去ろうと思います。

次号、第4号は2012年8月頃発行、第6回ケニア日本語弁論 大会、第2回ケニア日本語教育会議について掲載する予定で す。どうぞお楽しみに。

ケニア日本語教師会サイト

http://e-nihon.net/jaltak/では、活動状況を随時更新しております。 是非、ご覧ください。

JALTAK

(Japanese Language Teachers' Association of Kenya) ケニア日本語教師会 jaltak[at]e-nihon.net

(編集・蟻末)

